男子大学生における自身のセクシュアル・ハラスメントの実行可能性評価に影響を及ぼす要因

○小俣謙二¹

(駿河台大学心理学部)

キーワード：セクシュアル・ハラスメント、女性からの拒否の誤解、暴力的性の容認

Factors affecting the assessment of the possibility to commit sexual harassment

Kenji OMATA¹(¹Faculty of Psychology, Surugadai University)

Key Words: Sexual harassment, Misunderstanding of rejection by female, Acceptance of violent sex

目 的

レイプや性的暴行あるいは痴漢行為（強制わいせつないしは性的迷惑行為）といった性犯罪の実行に影響を及ぼす要因については、レイプ神話や敵対的女性観など、いくつかの要因が既に挙げられている（田口ほか，2010）。わが国でも、性犯罪受刑者（レイプまたは強制わいせつ）はレイプ神話の中でも暴力的性の受容（女性は暴力的に扱われることを望んでいるという認知を持つ）が強いことが示されている（大淵ほか，1985）。

一方、こうした暴力的性の受容あるいは田口らのいう強い性的衝動が存在しても、性犯罪に対する抑制要因が存在する場合にはそういった行為は実行されない可能性がある。その意味では、そういった抑制を弱める要因も性犯罪の遂行に関与すると思われる。そういった抑制を弱める要因として考えられるのが、被害者から向けられた拒否ないしは抵抗の姿勢の読み違いである。すなわち、被害者からの拒否を「拒否」と受け止めないため、前期欲求の充足に向かうと考えられる。被害女性の側の「スキ」や「挑発」はこうした誤解を強化するであろう。

もちろん、暴力的性の受容といった認知が誤解を生む可能性も十分考えられる。したがって、下記のような関係が推測できよう。

近年問題となっている性犯罪（的行為）として恋人間の暴力行為である dating violence (DaV) があるが、より身近な問題としては知人間のハラスメント行為がある。身体的接触などの（量刑的に）軽い犯罪行為は若者間ではかなり生じていることが報告されている（小西，1996；笹川ほか，1998；Omata，2002）。したがって、本研究では、セクシュアル・ハラスメント行為の心理的背景として、促進要因としてのレイプ神話（暴力的性の受容）、被害者側の態度（服装、抵抗）が、ハラスメント行為に対する被害者の抵抗の認知に及ぼす影響と、ハラスメント実行可能性に及ぼす影響を検討した。

方 法

回答者：男子大学生 78 名、平均年齢 20.3 (18-27)。

質問紙：回答者には 4 種類のシナリオがランダムな順序で書かれた質問紙を提示した。シナリオはカラオケでのハラスメントに対する被害者の抵抗場面が書かれている。抵抗の誤解を生む要因は大きく 2 条件に分かれている。ひとつは服装条件で、被害女性の服装が「胸元の大きく開いた薄手の T シャツとミニスカート」（挑発的服装）か「首元までしっかり閉めたブラウス

とロングスカート」（地味な服装）に分かれている。この場合、抵抗は弱い条件となっている。他は抵抗強度条件で、偶然男性の手が女性の太ももに触ったことに対して「軽くふざけた口調で、ちょっとやめてよ、という」（弱抵抗）か「眉間にしわを寄せ、まじめな口調で、ちょっとやめてよ、という」（強抵抗）かに分かれる。

今回分析した項目：「女性の厭がる程度の評価（1=かなり～5=全く）」「犯罪にならないなら、自分がさらに触る可能性（1=0%～5=100%）」また、「暴力的性の受容」（女性が暴力的性を望んでいるという認識、4 項目、 $\alpha=.71$ ）。

調査：調査は心理学の授業中に、回答は任意であること、拒否をしても不利益は生じないこと、などを告げた後に実施した。調査は 2012 年に実施した。

結 果 と 考 察

まず、暴力的性の受容はサンプル数が等しくなるように (39 名ずつ) 「受容傾向群」と「非受容傾向群」に分けた。

被害女性が厭がっているという判断について、服装 x 暴力的性の受容の分散分析を実施した結果、服装の主効果が有意 ($F_{(1,76)}=225.9, p<.01$) であったが、暴力的性の受容の効果、交互作用は有意ではなかった。すなわち、挑発的服装条件では「厭がっている」という判断が弱かった。同じように、厭がっているという判断について、抵抗 x 暴力的性の受容の分散分析を実施したが、ここでも抵抗の主効果が有意ではあったが ($F_{(1,76)}=21.2, p<.01$)、暴力的性の受容の効果、交互作用は有意ではなかった。すなわち、弱抵抗条件では「厭がっている」という判断が弱かった。

一方、自分がハラスメントを行う可能性の評価では服装 x 暴力的性の受容の分散分析、また抵抗 x 暴力的性の分散分析の結果、前者では服装の主効果 ($F_{(1,76)}=29.2, p<.01$)、暴力的性の受容の主効果 ($F_{(1,76)}=11.3, p<.01$) が有意であり、後者では抵抗 x 暴力的性の分散分析でも、抵抗の主効果 ($F_{(1,76)}=25.1, p<.01$)、暴力的性の受容の主効果 ($F_{(1,76)}=11.9, p<.01$) が有意であった。すなわち、挑発的服装や弱抵抗ではハラスメント遂行の可能性が高く、また、暴力的性の受容が強いほどハラスメント遂行の可能性が高かった。

以上の結果は、被害女性の拒否の誤解には暴力的性の受容という個人要因は影響せず、服装や相手の拒否の強さが影響すること、しかし、セクシュアル・ハラスメントの遂行は服装や抵抗に加えて暴力的性の受容という加害者側の要因が効くことを示したといえよう。とはいえ、本研究は予備的なものであり、今後さらに精密な条件下での確認が必要であろう。

本研究は筆者の指導のもと、駿河台大学心理学部山本あゆみさんが実施した調査 (2012 年度卒業研究) に、筆者が新たな分析を加えたものである。発表に同意してくれた山本さんに謝意を表します。(Kenji OMATA)